

小熊英二（慶応大学）

日本の学生叛乱——高度経済成長への集団摩擦反応

1948年の日本国民の一人当たりの年間推定所得はアメリカの12分の1、スリランカと同等だったが、1968年には日本のGNPは西側世界第2位となった。日本の学生叛乱は、この急激な経済成長への集団摩擦反応であったといえる。

1、なぜ叛乱は起こったのか

①都市の膨張と無党派層の増大

1945年の都市部人口は全国民の28%だったが、1970年には72%となった。これはアメリカが一世紀で遂げた都市化を25年で遂げたことを意味する。東京の68年の人口密度はロンドンの三倍であり、65年の調査では労働者の4割が5平方メートル以下の住居に住み、東京の総人口の47%が15歳から34歳だった。まだ貧しかった日本では娯楽も少なく、暴動もときに生じた。この都市部に住む若者が、日本の1968年の担い手になる。

②「受験戦争」と大学への不満

経済成長とともに、大学・短大進学率は1960年から1974年に約4倍になった。このため、「受験戦争」と俗称された激しい受験競争がおき、大学の人口過密がひどくなり、就職の質も低下した。

1968年に、当時の左翼学生組織の幹部は、こう述べている。「われわれのすべては、大きな希望をもって大学に入った」「だが、大学が与えるものはあまりにもおそまつである」「学生数の圧倒的増大は、学生の社会的地位をも著しく変化せしめ、大学を卒業したからといって大企業に就職するとは決していけない」「今日の学生運動は.....エリート的意識と存在の決定的欠落、そしてマスプロ化していく学園にあって、たえず人間としての真実をとりかえしたいという欲求が大衆的にひろがっていくことを基礎において成り立っているのである」。こうした学生の不満が、学生叛乱の一因となった。

③急激な近代化とアイデンティティ・クライシス

日本が発展途上国だった時代の、農村や旧市街で幼少期をすごした学生たちは、近代化に感覚がついていけなかった。1968年に東大を占拠した学生生活動家は、コンクリート製のビルや高速道路が立ち並ぶ東京に出てきたとき、農村ではまったく出会ったことのない非人間的な風景だと感じたことを述べ、多くの若者が「どこか社会がおかしい」「どこかよそよそしい感じがする」などと感じていたと回想している。

こうした感覚から、マルクスの疎外論が読みなおされ、反近代を唱えるロマン主義や不条理演劇が評価され、農村の民話を集める民俗学が注目を集めた。古風な武士道と日本主義を説く右翼作家の三島由紀夫も、左翼学生の人気となった。

2、日本の学生叛乱の特徴

倫理主義的傾向と「自己否定」

日本の学生たちの大学への不満は、進学率が低かった時代の、俗世間から隔絶した真理探究の府という大学イメージを裏切られたことが一因となっていた。

連合赤軍のメンバーとなった活動家は、「大学が学問研究の場とほうらはらに、就職のための予備校と同様であった」「政府・資本家の要求に応じている大学に失望してしまった」ことが、マルクス主義と反政府活動への傾斜をもたらしたと回想している。それはマルクス主義の資本主義批判と、産業社会に反発する保守的メンタリティの混合物だった。

この保守的メンタリティが青年らしい純粋志向と入り混じって、日本の学生運動は、個人の精神的修練を重視する倫理主義的傾向があった。東大の学生たちに、1968年に大学闘争の目的を複数回答可で尋ねたところ、「自己主体の確立」41・7%、「自己変革」31・7%、「現行大学制度解体」27・2%、「根源的思想追求」25・6%、「体制への拒否表明」25・0%だった。一方で「感性の解放」は5・5%にすぎない。東大を占拠した学生の将来の希望は、研究者が最多で、政界進出希望者は1%に満たなかった。

ところが一方で、敗戦後の民主主義教育をうけた学生たちは、旧来の大学の非民主的な運営にも反発した。旧世代の教授や経営者が権威主義的な大学運営を行ないながら、「就職予備校」と化していた大学のあり方は、学生たちのアンビバレントな感情の両側面から批判の対象となった。

②学生叛乱とサブカルチャー

当時の社会調査によると、アメリカの学生生活動家には高階層出身者が多いのにくらべ、日本の学生生活動家は中下層出身が多く、ボヘミア的な者はあまりいなかった。反資本主義と入り混じった倫理主義的な傾向とあいまって、学生生活動家の間では、ロックは商業主義的でブルジョア的な音楽と認識されていることも多かった。また68年当時、LPレコードは大卒初任給の1割、ギターは最低でも6割で、ロックを楽しむには学生は貧しすぎた。

ロックよりも学生たちが好んだ文化の一つは、日本製のヤクザ映画であった。典型的なストーリーは、資本主義と結びついた新興ヤクザと、古い道徳を重んじる旧タイプのヤクザが対立し、圧迫と屈辱をこうむった旧タイプのヤクザが殴りこみをかけるものだった。貧しい少年がスポーツで出世し、ブルジョアを打ち負かすマンガも好まれた。

ただし経済成長が急激に進むなかで、学生たちのメンタリティも変化していった。運動後半期になると、バリケード占拠された大学でロックコンサートも行なわれている。日本の若者の間で長髪が流行するのは学生叛乱が退潮した1970年ごろからである。

3、学生叛乱のその後

1968年に高揚した学生叛乱は、1970年までには沈静化した。日本の学生叛乱からは、大学の制度改革もおこらず、運動がその後に大規模に発生することもなかった。その第一の原因は、日本の学生叛乱の倫理主義的傾向である。大学の制度改革などを軽蔑し、「自己主体の確立」などを掲げる運動は、大学に何の変化ももたらさず、労働者からも共感を呼ばなかった。学生叛乱に参加した者のうち、政界に進出した者は非常に少なかった。第二の原因は、日本経済が好調だったことである。60年代の日本は年率10%以上、1973年と79年の石油ショックを経ても年率4%の成長を維持しており、学生生活動家たちも無事に就職できた。若者は完全雇用され、与党も安定していた。これは、二度の石油ショックのあと経済が停

2011 獨協国際フォーラム

滞し、それが社会全体への批判となって緑の党の台頭の一因となったドイツなどとは異なった。叛乱の倫理主義的性格は、日本が急激な経済成長のさなかだった後発国だったことの反映である。また 1970 年代から 80 年代の日本経済が好調だったことも、後発性と関係している。日本で農林水産業の就業者数を製造業のそれが上回るのは 1965 年だが、製造業の就業者数をサービス業のそれが上回るのは 1994 年である。1970 年代から 80 年代の日本では製造業が経済と雇用を安定させていた。いわばアメリカや西欧では工業化社会から脱工業化社会の移行期に「68 年」が起きたのにたいし、日本では伝統的社会から工業化社会への移行期に「68 年」が起き、それが叛乱の性格を規定したといえよう。

小熊英二（おぐま・えいじ）

1962 年東京生まれ。東京大学総合文化研究科博士課程修了。1997 年より慶應義塾大学総合政策学部、2007 年より教授。著書に『単一民族神話の起源 <日本人>の自画像の系譜』（1995）、『<日本人>の境界 沖縄・アイヌ・台湾・朝鮮：植民地支配から復帰運動まで』（1998）、『<民主>と<愛国> 戦後日本ナショナリズムと公共性』（2003）、『1968』（2010）など。